

第3章 構内遺跡の調査研究

1. 「20年の発掘成果展」における展示活動と評価—見学者アンケートの分析から—

はじめに

2007年6月5～17日に実施した「20年の発掘成果展」は、埋蔵文化財調査研究センター20周年記念事業の一つの柱であった。同時に、本展示会は、20年間にわたって継続してきた構内遺跡の発掘調査・研究成果を総括し、学内外へ公開する場でもあった。それゆえ、本展示会は、展示技術や成果の蓄積等の点では12回におよぶ既往の展示会の延長線上に位置するものである一方で、規模や企画構成、対象となる見学者層など様々な点で既往の展示会とは性質の異なるものとなった。ここでは、本展示会の展示活動について報告するとともに、見学者へのアンケート調査をもとにした展示評価を試みることにしたい。

展示の評価は、実施する時期によって企画・制作段階に行う形成評価と、展示公開後に行う総括評価に分けることができる。本稿で試みるのは完成した展示を対象とする総括評価にあたるが、展示会自体が会期の限られた企画展ということもあり、評価の方法自体は綿密に計画したものではなく、例年の展示会の折に継続的に実施してきた見学者へのアンケート調査を事後的に活用し、基礎データとしたものである。本稿で今回の展示会の評価を試みる目的の第一は、展示方法や企画とそれに対する見学者の反応についての基礎データを蓄積し、今後の公開活動や展示企画に向けての方向性や改善点を浮き彫りにすることにある。本展示会では、既往の展示会に比べ、実施規模が大きかったため、相当数のアンケートを回収することができた。また、見学者の構成も多様であったため、統計的な分析の対象とする標本としては適したものといえる。第二は、展示評価を行うことによって、「20年の発掘成果展」の意義を明瞭化することである。本展示会の実施は、学内施設ではなく設備・環境の整った学外の展示施設を会場とするという点でセンターにとっても新たな試みであった。また、学内事業としてみても、恒常的・体系的な展示施設をもたない現状で、センターの蓄積してきた膨大な学術標本をどのように活用するかを検討する機会でもあった。本展示会が学内外に及ぼした意義を把握するには、まず展示活動自体の正確な評価を行う作業が必要となろう。

1. 「20年の発掘成果展」の概要

a. 展示事業の概要

「20年の発掘成果展」は、テーマを『自然と人間、地中に埋もれた命の対話』として、6月5～17日の12日間にわたって実施した。会場は、岡山市デジタルミュージアム4階の企画展示室である。延べ利用面積は、約515㎡である。既往の展示会の延べ利用面積は、センターに付属の展示室（約18㎡）を利用した場合では、およそ30㎡内外であろう。利用面積で比べれば、例年の約17倍程度の規模となる。出展資料は、約400点である。

見学者は、12日間の合計で2,161名で

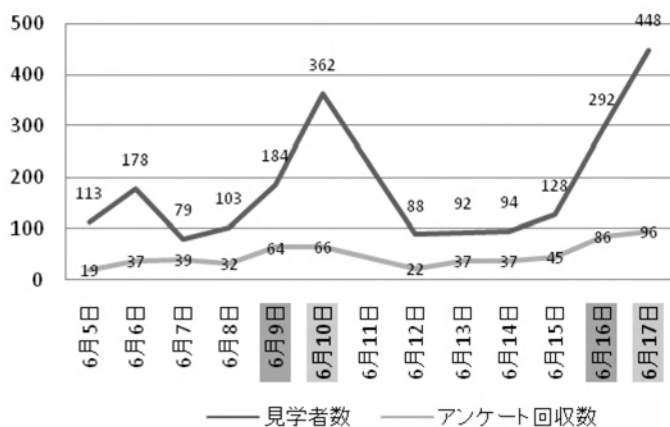


図44 「20年の発掘成果展」における見学者数とアンケート回収数

ある。アンケート回収数は580部で、回収率は26.8%である。一日平均の来場者数は、約180名である。土・日曜日（6月9・10・16・17日）には平日の2～4倍の見学者数を得ることができた（図44）。なお、会期中に複数回入場した見学者もいるため、実質のアンケート回収率はもっと高いと考えられる。

会期中の日曜日に、展示内容と関連したテーマで記念講演会を2回実施した。6月10日に『鹿田、古代・中世のにぎわい』、6月17日に『津島、自然のなかの縄文人』である。参加者数は、それぞれ70名、125名であった。日曜の展示見学者の顕著な伸びは、講演会聴講と併せて来場したためと考えられる（図44）。そのほか、6月5日に学内外の関係者を招いてオープニング・セレモニー、記念祝賀会を実施している。

展示会に関連した印刷物として、パンフレット（A4判、10頁）、リーフレット（A4判、三つ折）、がある。これらは、来場者全員に配布され、展示を見学する際の手持ち資料となるものである。そのほか、展示会終了後に刊行した『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年』において、本展示会の概要をまとめており、展示図録に相当する内容の出版物となっている。

b. 企画趣旨と展示の全体構成

今回の展示は、導入部分と4つのテーマセッション、そしてワークショップ／大学紹介コーナーという、大きく6つのセッションによって構成されている（図45）。展示の中核となるのは4つのテーマセッションで、それぞれ「水とめぐみ」、「心といのり」、「荘園の世界」、「戦いと人びと」という、タイトルが冠されている。基本的には、これら4つのセッションで縄文時代からはじまり近代におよぶ構内遺跡の歴史をたどる、時代順展示の形態を採っている。しかし、セッションごとに完全に時代順には分離しておらず、少しずつ重複した展示となっている。これは、時代順展示の形態を採りつつも、『自然と人間、地中に埋もれた命の対話』という全体テーマに即して、津島岡大・鹿田の両構内遺跡の出土資料の特長を活かせるような展示テーマを各セッションに設定したためである。したがって、各セッションは時代性ととも、全体テーマである人間と自然のかかわりの歴史を4つの異なる視点を通して描き出すという二重の役割を担っていることになる。また、今回の全体テーマは、いわゆるモノ中心の展示ではなく、モノの背後にある各時代の人間と自然の歴史を描くことを目的としており、そのため既往の展示会と比べて通時代的な内容であるとともに、現代的なメッセージ性の強いテーマであることも特



図45 会場平面図（縮尺1/300）

色といえる。

展示の全体的な特徴 4つのセクションは、後述するように、幅のある展示手法をとっており、それぞれに特色が認められる。これらに共通の、展示の全体的な志向として挙げられるのは、参加・体験型展示の積極的な導入と床面展示の多用である。両者に共通しているのは、いずれも見学者にわかりやすい、空間体験型の展示、イメージしやすい手法ということであろう。どちらの手法もセンターが既往の展示会において

採り上げてきたもので、限られた機会や展示スペースで、わかりやすく調査の方法や研究成果を伝える試行錯誤の延長線上に位置するものである。

動線配置 次に、動線配置をみておくことにしたい(図46)。動線の全体の流れは時計回りになっているが、これは会場の出入口の配置に制約を受けたものである。また、6つのセクションは順番に回るように設定されており、全体としては規制誘導方法を採用しているといえる(図47中)。これは、時代順展示に適した動線配置を採った結果といえるが、各セクションでみた場合、規制の強弱にはかなりの幅がみられる。

2. 各セクションの構成と展示形態の特徴

本展示会では、全体テーマのもと中心となる4つのテーマセクションを設け、結果として展示形態や手法も各4セクションで相応の幅をもつこととなった。後述するアンケートの結果においても、セクション別の評価に有意の差を見出すことができた。ここでは、アンケートの分析を進める前に、各セクションの構成と特徴をまとめておきたい。

a. 導入

入って左手には趣旨説明、構内遺跡の概要説明のパネルが、右手には縄文時代の森から弥生時代の水田への景観の移り変わりをイメージさせるイラストと写真のタペストリーが並ぶ。利用面積は、28㎡である。

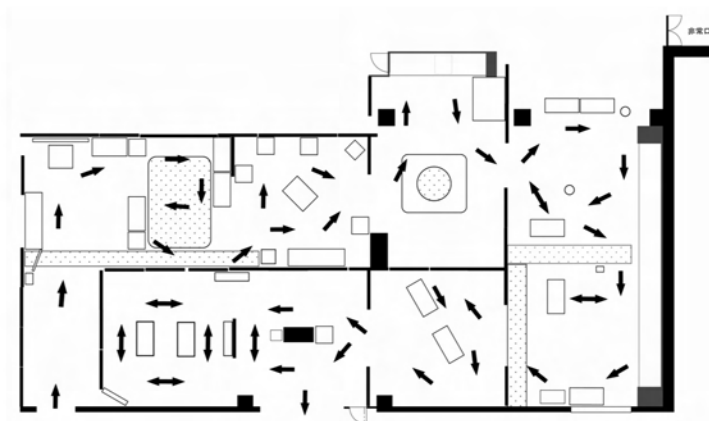
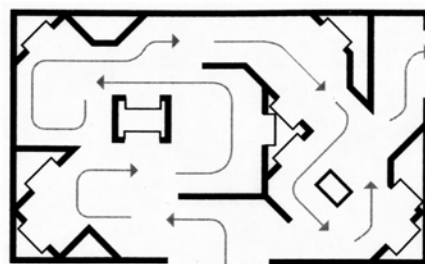
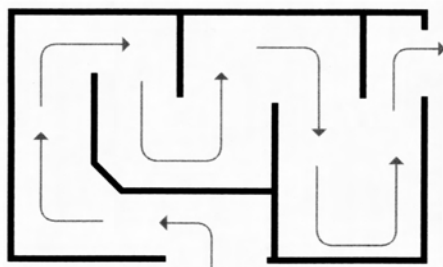


図46 動線配置図 (縮尺 1/400)

示唆的誘導方法



規制誘導方法



非規制誘導方法

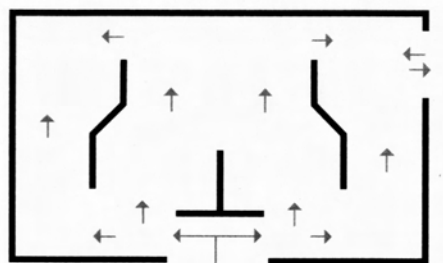


図47 動線配置の類型
(デビッド・ディーン2004から引用)

b. 「水とめぐみ」

「水とめぐみ」は、4つのテーマセクションの最初に位置する。津島岡大遺跡の成果を中心に、縄文時代から弥生時代への川辺の景観の移り変わりを通して、水稻農耕のはじまりにともなう人間と自然とのかかわりの変化に焦点をあてた展示を目的とする。前半部に縄文時代、後半部に弥生時代の資料を配置しており、時間軸展示の性格がつよいセクションである。見学者が目にする順番を想定して各展示ケース・装置を配置しているため、動線も4つのセクション中でもっとも規制がつよくなっている。利用面積は、約74㎡である。



図48 『水とめぐみ』コーナー展示

時間軸展示のなかに、本学の自然科学系の研究者との共同研究の成果を展示したケースを組み込むことができたのも、本セクションの特徴である。縄文時代の部では水田雑草の種子（環境理工学部 沖陽子教授 監修）を、弥生時代では石器石材の原産地（理学部 鈴木茂之准教授 資料提供・監修）と雑草メロン種子のDNA分析（農学部 加藤鎌司教授 パネル提供・監修）の研究成果を展示することができた。これら自然科学との共同研究の成果を併せて展示できたことによって、全体テーマとのつながりがもっとも顕著にあらわれたセクションとなった。

ところで、各テーマセクションには象徴展示となるような資料が配されている。「水とめぐみ」の場合では、実物の貯蔵穴（切り取り保存したもの）とその使用状況の復元画に高さ4.2mのタペストリーを背景に組み合わせた展示がその役割を果たした（図48）。

c. 「心といのり」

「心といのり」は、縄文時代から弥生時代にかけての自然と人間のかかわりを、当時の人間の精神世界に焦点をあてて展示したセクションである。利用面積は、約48㎡である。本セクションでは、象徴展示となる弧帯石（倉敷市楯築遺跡）・タペストリー・照明演示具との組み合わせによる展示（図49上）を中心に、小型の展示ケースを周囲に配置している（図45・46）。そのため、動線の規制は4テーマセクション中でもっとも弱くなっている。また、展示手法として単体展示と回転台を用いた動態展示の活用が特徴的にみられ（図49下）、動線設定のあり方とともに、一つ一つの資料をみせる鑑賞的な性格のつよい展示が全体に採られているといえる。照明は他のセクションに比べて暗めに設定されており、中心に配置した象徴展示が浮き上がる、神秘的な雰囲気漂うセクションである。

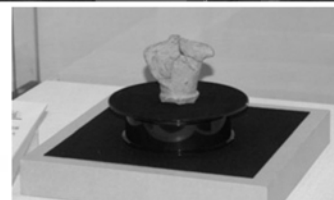


図49 『心といのり』コーナー展示

d. 「荘園の世界」

「荘園の世界」は、古代から中世の鹿田遺跡の調査成果を中心に、「鹿田庄」における荘園経営のようすや暮ら

しの賑わい、条里地割の導入による自然改変の歴史に焦点をあてたセクションである。出展資料数・利用面積ともにもっとも規模の大きなセクションで、前セクションまでの自然改変の歴史の一つの到達点として、荘園という小世界で豊かな文化が花開くようすを物語る展開構成となっている。利用面積は約205㎡である。前半部に古代、後半部に中世の資料を配置する。動線の規制はさほどつよくなく、必要に応じて順路を選択できる示唆的誘導方法に近い。象徴展示は、古代の井戸杵（実物）の展示である（図50右）。床面のカーペットで井戸杵の掘り形を表現している。本展示は、アンケート調査で印象にのこったものを尋ねる設問において、もっとも回答数が多かった。また、古代の部では、「鹿田庄」の調査成果をダイジェストでみることのできる映像展示コーナーを設けている。



図50 『荘園の世界』コーナー展示

「荘園の世界」の展示の特徴は、中世の部において顕著にみることができる。中世の部では、展示空間を荘園に見立てて、複数の展示グリッド（職人長屋・市場・屋敷地・台所など）を有機的に関連させて配置する、構造展示的な手法を採っている（図50下）。また、各グリッドでは絵図と考古資料をセットとして展示するなどの組み合わせ展示によって、荘園のなかの情景をイメージしやすいように工夫している。図50左は、絵図と調理用具の組み合わせ展示によって屋敷地内の台所を表現したグリッドである。

本セクションでは、古代の部（橋脚杭）、中世の部（土師質碗の型式変化）のそれぞれで、資料を見学者に実際に触れてもらう、いわゆるハンズオンを実施した。

e. 「戦いと人びと」

「戦いと人びと」は、弥生時代から近現代までを対象に、構内で見つかった戦いの存在を示す遺物や痕跡に焦点をあてたセクションである。最後尾に位置するテーマセクションで、人間社会の負の側面をとりあげて「命の対話」の結びとする展開となる。前半部では弥生時代における戦いのはじまりから近世の和流砲術までを、後半部では構内に現存する旧陸軍関連施設を中心にとりあげた。前半部と後半部で展示形態を大きく変えており、前半部は規制的な動線を敷き、時間軸展示を採っている。反対に、後半部は非規制的な動線で、解説パネルによる現存施設の紹介・展示が主体となっている。他のセクションに比べ、一次資料よりも写真・図・映像など二次資料を用いた展示が多く、とりわけ後半部ではその傾向が強い。映像展示コーナーを2か所に設け、それぞれで展示の



図51 『戦いと人びと』コーナー展示

ダイジェストをみることができる。象徴展示は、後半部の入口に掲げた旧陸軍第十七師団司令部（旧事務局棟）の写真パネルである（図51）。利用面積は、約98㎡である。

f. 大学紹介／ワークショップ

最後のセクションは、「自然と人間、21世紀の岡山大学」というテーマのもと、学内の最新の研究成果をパネルで紹介するコーナーと、ワークショップで構成される。前者は、各学部から全体テーマに関連する研究成果を紹介してもらう内容で提供頂いた



図52 大学紹介／ワークショップコーナー

パネルと、大学紹介ムービー（常時放映）で構成される。後者は、3種類の参加体験型展示で構成される。「土器を組み立ててみよう」は土器接合の体験を、「石器をさがそう」は礫や剥片のなかから石器を判別する体験を、「くぐつまわし」をさがそう」は絵図中からクイズ形式で特定の人物や情景を探しだしてもらう展示である。中央のスペースでワークショップを、周囲の壁面でパネル展示を実施した（図52）。会場出口は「戦いと人びと」に接続しているため、本セクションへの出入りは見学者の自由である。ワークショップでは、会期中常時2名のスタッフが見学者への対応をとった。利用面積は、約48㎡である。

3. 展示構成の取り組みと成果・課題

本展示会で実施した取り組みの多くは、既往の展示会において部分的・実験的に実施してきたものである。しかし、会場や展示規模の違いもあり、制作段階から一からの試行錯誤を要したものもある。ここでは、今回の展示の取り組みのいくつかを採りあげて、成果と課題をまとめておきたい。

a. 視聴覚映像展示

映像展示は、計4か所で実施した（図45）。「荘園の世界」（図53左）、大学紹介パネルコーナーで各1か所、「戦いと人びと」で2か所である。内訳を表3に示した。いずれも常時放映で、大学紹介「希望という名のデッサン」以外は無音声である。スライド放映の3展示は、いずれも設置セクションの展示の流れを掴むための補助的な機能を担うものである。全体的に上映時間の設定が長めで、インタラクティブ型の展示ではないため、休憩スペースと併置して息抜き効果を狙った側面がつよい。ただし、設置箇所がいずれもセクションの冒頭部分にあたるため、導入としてはやや間延びを生む傾向があった。映像展示の動線上の位置付けについては、今後の課題といえる。また、DVDを制作した『鹿田遺跡と「鹿田庄」』については、解像度の調整に問題が残り、見えづらかったという感想がアンケートに散見された。

表3 映像展示の概要

タイトル	設置セクション	映像種類	上映時間
鹿田遺跡と「鹿田庄」	荘園の世界	投射映像	8：00（スライド29枚分）
兵どもが夢の跡 第1部	戦いと人びと	直視映像	5：50（スライド21枚分）
兵どもが夢の跡 第2部	戦いと人びと	投射映像	5：30（スライド28枚分）
希望という名のデッサン	自然と人間、21世紀の岡山大学	直視映像	17：48（音声有）

b. 床面展示

床面展示は、計6か所で実施した（図45）。そのうち3か所は、河（水とめぐみ〜心といのり）・水路・道（荘園の世界）を表現したもので装飾的な意味合いがつよい展示である。残りの3か所では、弥生時代前期の水田畦畔（図53中）、古代の井戸枠掘り形（図50右）、古代の掘立柱建物の柱穴跡の展示を試みた。これらはいずれもカーペットで実物大に遺構の表示を行ったものである。これらは、水田区画や建物の大きさを一目で体感できるため、アンケートにおいても好意的な意見が多く見られた。視覚だけでなく、歩行時の感覚にも刺激をもたらす点が見学者の印象に残りやすい要因と考えられ、展示の流れに変化をつけるには有効な方法といえよう。ただし、通行の障害にならないように、解説パネルでの表示の仕方や、段差をつけないための細工、足元の照明の調整など、制作時の綿密な調整は不可欠である。今回の展示では通行上の問題は生じなかったが、床面展示と解説パネルが離れており、やや関係がわかりにくかったようである。

c. 参加体験型展示

参加体験型の展示は、ワークショップで実施した3展示以外に、「荘園の世界」で2展示を実施した。古代の部のは、橋脚杭（PEG処理済み）に実際に触れてもらうことで、木製品の大きさや手触りを実感してもらうというものである。中世の部では、土師質椀の型式変化を手にとって観察してもらうハンズオンを実施した。

参加体験型展示・ワークショップは概ね好評であった。とりわけ土器接合は珍しい試みとして多くの見学者の興味をひいたようで、印象に残った展示を挙げるアンケート調査で3番目に多い回答を得ている（図53右）。アンケートには土器接合が「想像より難しかった」、「大変だった」等の感想も散見され、経験者のアドバイスを受けながらの参加が理解を助けるのに不可欠のようである。ワークショップ・土器接合は、会期中常時参加可能な体制であったため、見学者とスタッフとのコミュニケーションの場として機能しやすい環境でもあった。人的コストとしては大きく、企画展という形態でこそ可能な試みではあるが、常設的なワークショップの大きな利点と言えよう。「研究の様子が伝わった」といった感想にみるように、ただ資料に触れるだけでなく、コミュニケーションを通して見学者の展示への理解を深めることができた点は、コストに見合う大きな成果と言える。

d. 多様な見学者層への対応

多様な知識レベルをもつ見学者への対応として、解説パネルよりも詳細な情報を盛り込んだ解説シート（A4判）を3か所で自由配布した。「心といのり」で2か所、「荘園の世界」で1か所である。バリアフリーへの取り組みは、先述の床面展示の細部加工以外に積極的な実施は行っていない。そのほか、照明が反射してケース内に設置した解説パネルが見難いなどの意見が寄せられたが、見学者の多様な要望をさらに検討していくことは今後の課題となろう。



図53 本展示会における主要な取り組み

4. 見学者アンケートの分析による展示評価

展示を評価する主な方法として、面接法・観察法・アンケート調査法がある。ここでは、見学者へのアンケート調査から展示評価を行いたい。

a. 見学者の属性

まず、見学者の属性構成をみておきたい。図54は、縦軸にアンケート回答数、横軸に回答者の年齢を示したものである。男性見学者は、年代が上がるにつれて増え、女性は20代を頂点にして年代が上がるに緩やかに減少する傾向がある。全体では、男性が57%、女性が41%となっており、やや男性見学者が多い。本展示会では、60～70代以上の男性が見学者の比率としてはもっとも高かったことになる。これらの数字は、アンケート調査の結果であり、実際は10才未満から10代の構成比率がこれより高い可能性があるものの、以下では図54の属性構成を本展示会の基準とみなして分析を進めることにしたい。

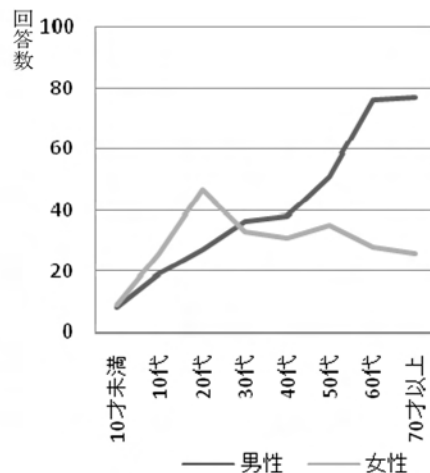


図54 見学者の属性構成

b. 広報活動の効果と見学者の属性

本展示会の広報活動の構成は、大きく3種類の方法に分けることができる。第一は、ポスターやチラシといったセンターから配布する紙発行物によるもの。第二は、新聞・テレビといった公共的な媒体によるもの。第三は、ホームページや電子メールなどインターネットを用いたものである。情報取得媒体と見学者の回答数の関係を図6に示した（複数回答可）。新聞・テレビによる効果がもっとも大きく、全体の約34%は公共的な媒体によって情報を得ている。次に多いのが、ポスター・チラシによるもので、二つを合わせると全体の約24%、埋文センターからのお知らせまでを含めると約28%がセンター配布の紙媒体で情報を得ている。ホームページ・電子メールは、全体の約8%である。なお、ホームページによる広報は、センターと今回の会場となった岡山市デジタルミュー

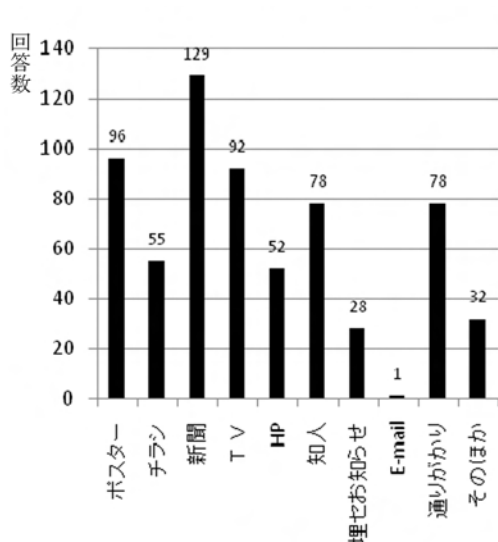


図55 情報取得媒体の構成

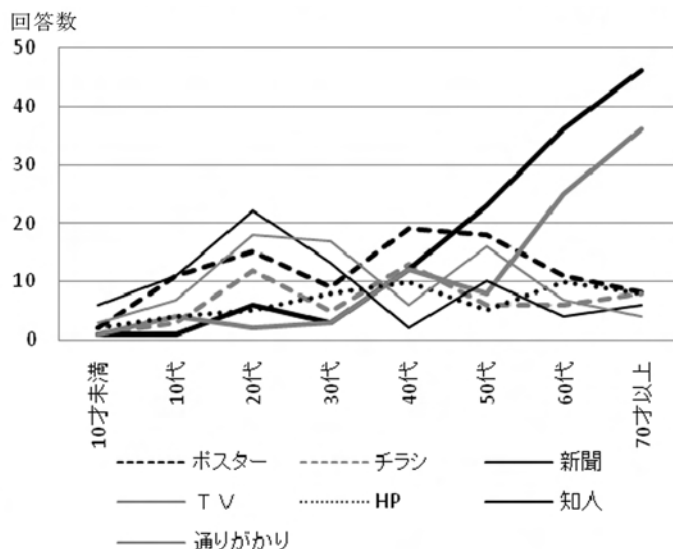


図56 情報取得媒体と見学者属性

ジラムの2つのサイト上で公開している。注意すべきなのは、知人・通りがかりといった固定的な媒体を経ずに情報を得ている見学者が相当数みられる点で、これらを合わせると約24%になる。通りがかりの多さは、今回の会場が岡山駅を目前にする立地環境の良さに起因するものであろう。

次に、情報取得媒体と見学者属性の関係を図56に示した。縦軸は回答数である。第一の特徴は、もっとも影響力をもつ媒体である新聞とテレビが60～70代以上を中心に効果を与えているということである。これは、本展示会の見学者の年齢構成を考えれば理解しやすい結果である。逆に、60～70代以上では、新聞・テレビ以外の媒体はいずれも低い数値を示している。また、若年層においては、新聞・テレビの効果は非常に小さいものである。ポスターは、40～50代を中心に効果が大きかったことがわかるが、紙媒体（ポスター・チラシ）はどの年代でも一定の効果を及ぼしており、年代間に効果の偏りの少ない安定的な媒体といえそうである。ホームページによる効果は、全体における数こそ少ないものの、年代間の大きな偏りもみられず、高齢層にも一定程度浸透している媒体とみてよいように思われる。今後の活用方法の工夫が期待できる媒体と言えよう。いま一つの大きな特徴は、20～30代前後の若年層ほど情報取得媒体が多様化してみえるなかで、知人・通りがかりといった固定的な媒体を経ずに情報を得ている割合がもっとも高くなっている点である。これが、若年世代の情報取得行動の特質に起因するのか、本展示会が学内事業であるために学生層が知人・教職員等を通して情報を得る機会が多かったことに起因するのか、ただちには判断しにくい。しかし、知人による情報取得を除いても、やはり20代を中心とする通りがかりの多さは、本展示会の特徴であるとともに、若年層に特有の情報取得行動のありかたを反映したものと考えるべきであろう。

c. 見学者の属性とセクションの評価

ここでは、セクションの評価と見学者の属性を比較することで、各セクションの展示内容が見学者にどのような反応を与えたか、反応が見学者の属性によってどのように変動するかを検討することにした。

まず、各セクションの評価をみることにしたい。図57は、セクション・コーナー別におもしろかったものを回答してもらったものである（複数回答可）。ワークショップ合計の項目には、3種類の展示それぞれの回答数の合計に、ワークショップ自体の回答数も含めている。テーマセクションでは、「水とめぐみ」の評価がもっとも

高かった。ワークショップは、3展示の合計でみると一つのテーマセクションに相当する評価を受けている。

次に、各セクションがどのような属性の見学者に評価を受けているかを検討してみたい。図58は、横軸に回答者の年代を、縦軸に各セクションを100%とした回答率をとって、図57の年代別の内訳を示したものである。

「水とめぐみ」・「荘園の世界」は、いずれも男性が右肩上がり、女性が20代を頂点に減少する属性分布を示す。これは先に図54に示した見学者全体の属性構成とほぼ一致するとみてよい。つまり、見学者の属性の影響をさほど受けずに、どの見学者からも一定の評価を得たセクションといえる。そのほかのセクションには、それぞれ分布に特徴が認められる。「心といのり」は、20～30代の女性からの評価が高く、60～70代以上の男性からの評価の伸びは、全体の属性構成を考慮すると低めにとどまっているといえる。「戦いと人びと」では、男性からの評価に特色がみられ、

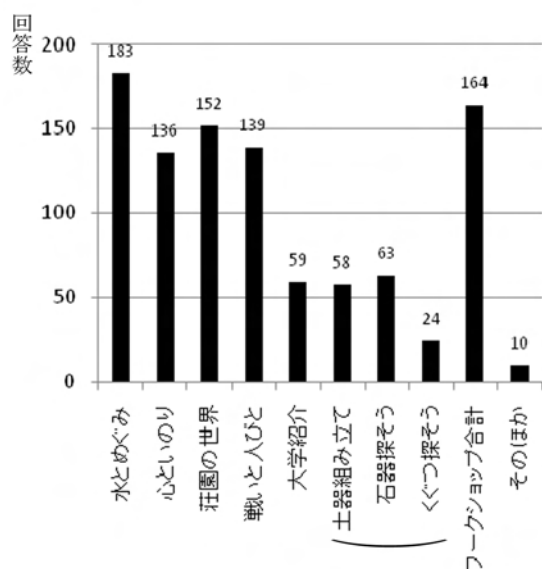


図57 各セクションの評価

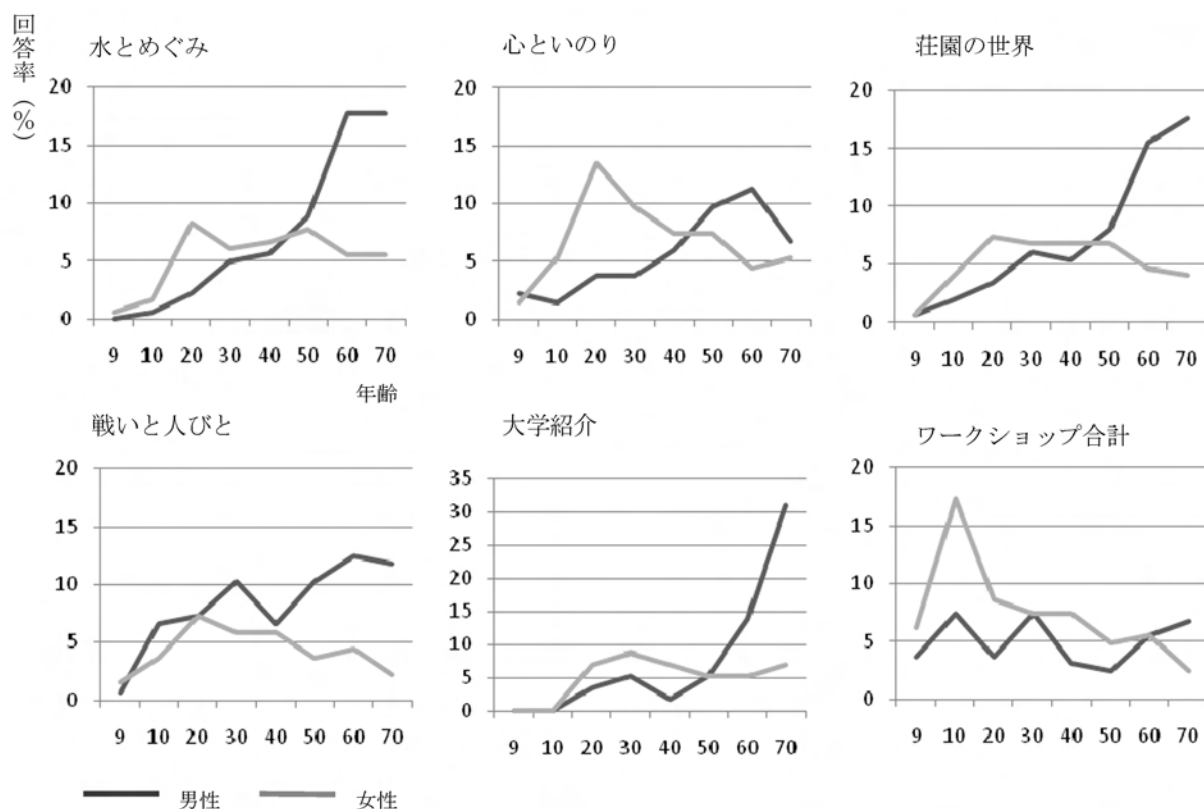


図58 各セクションの評価と見学者属性

20～30代男性からの評価が高い傾向がある。40代でやや断絶がみられ、50代以上になると回答率は増加するものの、全体の属性構成と比較すると評価はやや低めである。大学紹介のコーナーは、60～70代の男性からとりわけ評価を受けた。ワークショップは、唯一10代からの評価が顕著にみられるセクションである。とりわけ10代女性からの評価を受け、10才未満の男女においても他のセクションに比べてやや高めの数字が出ている。反対に、高齢層からの支持はきわめて低い。

d. 見学者の知識レベルと展示評価

展示の評価と見学者の属性の関連性については、以上の分析から十分うかがうことができるであろう。最後に、セクションの評価を分ける要因を、もう少し別の角度から検討してみることにしたい。

アンケート調査では展示全体の難易度を5段階（わかりやすい：5～難しい：1）で回答してもらっている。難易度平均は3.98で、大半の見学者からわかりやすいという評価を受けた結果となる。では、今回の展示を相対的にわかりやすいと感じた見学者と、難しいと感じた見学者では、各セクション・コーナーへの評価にどれほどの違いがみられるのだろうか。図59には難易度4以上の回答者と3以下の回答者のセクション別評価の違いをまとめた。縦軸は回答率を示す。相対的に全体の展示内容を難しいと感じた回答者が、テーマセクションでの展示よりもワークショップに高い評価を与えているのは明らかである。テーマセクションでは、「戦いと人びと」だけに難易度による差がみられなかった。「荘園の世界」は、難しいと感じた回答者からの評価がやや低めとなっている。

次に、既往の展示会の見学経験の有無によってセクションの評価を検討したものが図60である。見学経験の有無は、展示に関する予備知識の有無としてここでは読み替えておくことにしたい。見学経験のない回答者は、や

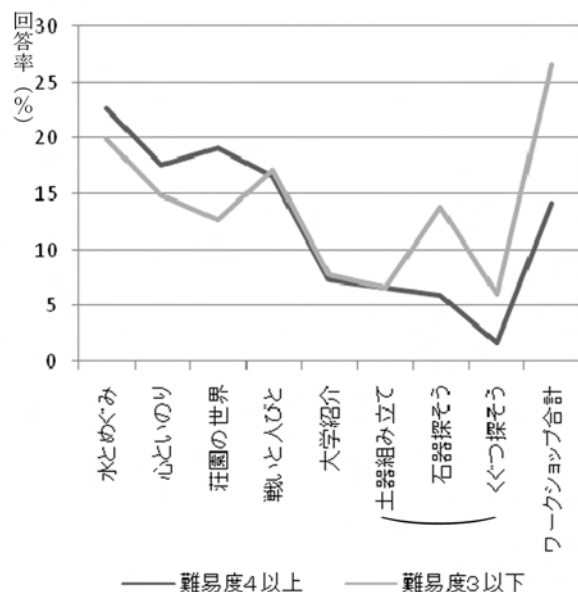


図59 難易度評価とセクション評価

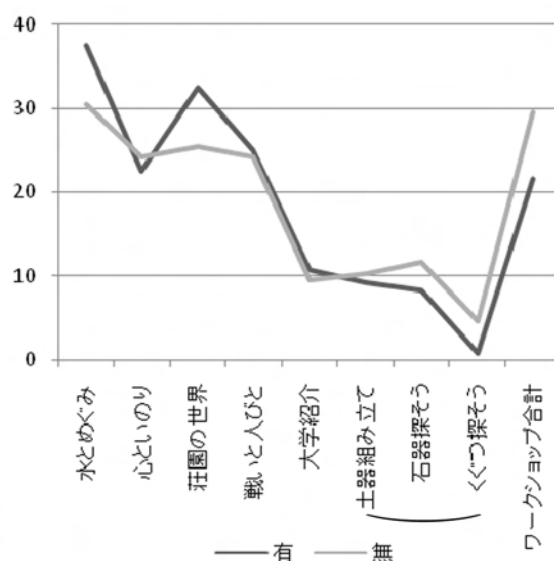


図60 既往展示会の見学有無とセクション評価

はりテーマセクションよりもワークショップに高い評価を与える傾向がある。また、「水とめぐみ」・「荘園の世界」において見学経験の有無で評価が分かれる傾向にある。

e. 分析のまとめ

以上の分析結果は、限られた項目のアンケート調査を活用したものではあるが、様々な要因によって展示の評価が形成されていることをうかがわせるものである。とりわけ興味深いのは、各セクションによって主要支持層に違いがみられる点である。「水とめぐみ」・「荘園の世界」は、どの分析においても非常に類似する傾向を示している。つまり、年齢や性別によって評価の偏りが無い一方で、展示に対する予備知識をもつ見学者からより受け入れられやすい展示だったといえるであろう。「心といのり」・「戦いと人びと」は、主要支持層に特徴があり、これは2セクションの設定テーマに起因するものであろう。ワークショップは、様々な点で4つのテーマセクションとは反対の結果を示している。つまり、10～20代の若年層を中心に支持があり、予備知識の少ない見学者から評価が高い傾向があった。「水とめぐみ」・「荘園の世界」がテーマセクションの典型として、主要見学者層となる高齢層のニーズを満たすものであったとするなら、その対極の若年層をワークショップが担い、「心といのり」・「戦いと人びと」がやや変則的なテーマによって対極の空白部分を担ったものとして全体の構成を位置づけることもできよう。

いずれにしても、以上の分析結果から大雑把に二つの見学者層の存在を読み取ることは不可能でないように思われる。一つは、高齢者を中心とする、「水とめぐみ」・「荘園の世界」といった、モノを中心とした、より従来の傾向をもつテーマや展示内容に高い評価を与える見学者層である。この層は、より専門的な知識を求めて来場している可能性が高く、リピーターの多くもこの層によって構成されているように思われる。もう一つは、若年層を中心とする、ワークショップなどの参加体験型展示や、「心といのり」・「戦いと人びと」といった特定のテーマに高い評価を与える見学者層である。この層は、展示に対して専門的な知識の獲得よりもわかりやすさやおもしろさといったものを求めていると考えられる。

本展示会の構成を改めて振り返ると、既往の展示会よりも幅の広い見学者層を対象としながらも、結果として

各セッションが相補的な役割を果たしたことが難易度平均3.98という好評価に結びついたものと思われる。今回のような規模・構成の展示会を恒常的に継続していくことは困難であろうから、今後の展示会で規模を縮小した際に今回のようなセッション間の展示の相補性をどのように企画・実現していくかということは留意しておいてよいように思われる。

おわりに

a. 「20年の発掘成果展」の位置づけ

アンケート調査を活用することで本展示会の評価を試みてきたわけだが、既往の展示会との比較を行い、本展示会の意義をまとめることにしたい。図61には既往の展示会との見学者構成の比較を示した。

第5回展示会の該当データはなく、リピーターの調査は第6回目以降である。本展示会の構成は、学外見学者率においても、新規見学者率においても既往の展示会に比べて高いことがわかる。見学者数においても、既往の展示会が400名を越えることがなかったことからすれば、利用会場を変えたことが規模や見学者構成など今回のあらゆる面での質的な変化をもたらしたといえるであろう。

本展示会の意義の第一は、より広範な一般市民への成果の公開に成功したという、学外的・対外的な点にあらう。既往の展示会に比べ見学者数だけでなく、学外所属者・新規来場者の割合が高いことは、関係者や考古学に関心の高い見学者のほかにも地域市民の相当数の参加があったとみるべきであろう。第二は学内的な意義であり、広く市民の評価を受ける機会となっただけでなく、多くの学内関係者へもセンターの成果の集大成を示す場となった点である。岡山大学は約130万点にのぼる学術標本を保有しているものの(考古資料が7割以上を占める)、恒常的・系統的な展示を行う環境をもたないのが現状である。そのような状況において、設備・環境の整った会場で構内遺跡出土の考古資料を中心とした通時代的な展示が可能であることを示せたことは、埋蔵文化財の保護・活用のありかたに理解をもたらすだけでなく、今後の大学博物館構想においても多くの参考資料を提供するものであらう。第三は、センターとしての意義である。20年間にわたる調査・研究の蓄積を、展示会の制作を通して解説パネルや出版物などの一定の成果物として残すことができたことはもちろん、学内の研究協力者との連携が進んだ点も重要である。また、既存の成果の全体像を総括しなおすことで、調査研究の現状と課題を浮き彫りにする機会となった。

本展示会の意義の第一は、より広範な一般市民への成果の公開に成功したという、学外的・対外的な点にあらう。既往の展示会に比べ見学者数だけでなく、学外所属者・新規来場者の割合が高いことは、関係者や考古学に関心の高い見学者のほかにも地域市民の相当数の参加があったとみるべきであろう。第二は学内的な意義であり、広く市民の評価を受ける機会となっただけでなく、多くの学内関係者へもセンターの成果の集大成を示す場となった点である。岡山大学は約130万点にのぼる学術標本を保有しているものの(考古資料が7割以上を占める)、恒常的・系統的な展示を行う環境をもたないのが現状である。そのような状況において、設備・環境の整った会場で構内遺跡出土の考古資料を中心とした通時代的な展示が可能であることを示せたことは、埋蔵文化財の保護・活用のありかたに理解をもたらすだけでなく、今後の大学博物館構想においても多くの参考資料を提供するものであらう。第三は、センターとしての意義である。20年間にわたる調査・研究の蓄積を、展示会の制作を通して解説パネルや出版物などの一定の成果物として残すことができたことはもちろん、学内の研究協力者との連携が進んだ点も重要である。また、既存の成果の全体像を総括しなおすことで、調査研究の現状と課題を浮き彫りにする機会となった。

b. 展示評価のまとめ

本稿で「20年の発掘成果展」の評価を試みたのは、見学者の評価を知ることが単なる自己評価にとどまらない本展示会の位置づけを探る方法と考えたためであり、また、その位置づけが展示会のみにとどまらない意義や波及性をもつと考えたためである。最後に、展示評価のまとめを行うことにしたい。

展示評価の成果として、第一に挙げることができるのは、見学者の属性把握における分析結果である。見学者の属性によって、展示の評価だけでなく情報取得の段階においてすでかなりの幅が存在することは分析の項で検討してきたとおりである。見学者は、大雑把に見積もっても、より専門的・高度な知識を求める層と、わかりやすさを重視する層に二分できると考えられ、展示において専門性と一般性の対立をどのように実現していくか

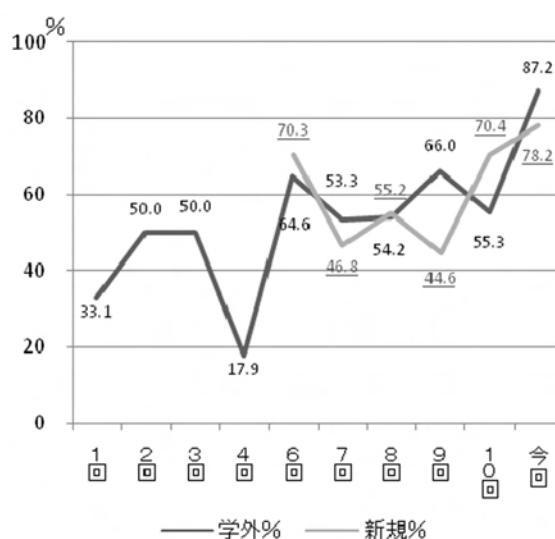


図61 既往展示会と見学者構成の比較

は今後の大きな課題である。それは、言い換えるなら、新たな見学者層を開拓することとリピーターの満足度を高めていく作業ということになる。第二は、テーマ設定・企画の重要性である。本展示会は、基本的に歴史展示を対象としたものでありながら、各セクションでは設定テーマによって見学者の反応が大きく異なることがわかった。また、同じ考古資料を扱いながら、テーマセクションと参加体験型のワークショップでは対極の評価を示す結果となった。見学者の属性を十分考慮しつつ、展示に対する多様な要望を限られたスペース・予算で実現していくことが必要となる。

一方で、本展示会が、見学者から全体に高い評価を受けたのは間違いない。それは、センターの調査研究の積み重ねや既往の展示会での試行錯誤が一定の理解を得たことを示すであろう。センターは、展示活動を事業の根幹とするわけではない。しかし、一次資料の収集から整理・研究、成果の公開までを一貫して担うことが博物館との大きな違いであり、それゆえに、展示の評価を調査や研究などの他の事業全体に直接フィードバックしていくことも可能であろう。専門性と一般性のバランスをどのようにとっていくかという課題は、展示だけでなく、大学の一機関としてどのように地域や学界に貢献していくかという課題とも併せて、さまざまな場面で検討していく必要がある。

(池田 晋)

【引用・参考文献】

青木豊1997『博物館映像展示論—視聴覚メディアをめぐる—』雄山閣

岩崎志保2007『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』40号 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

加藤有次他2000『博物館展示法』新版・博物館学講座 第9巻 雄山閣

「大学博物館のあり方と学内学術標本のデータベース化に関する学際的研究」プロジェクトチーム・岡山大学総合研究博物館（仮称）構想検討会 編・発行2000『岡山大学 自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして— 資料・研究編』

デビッド・ディーン2004『美術館・博物館の展示 理論から実践まで』丸善

西野嘉章1996『大学博物館—理念と実践と将来と』東京大学出版会

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編・発行2007『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年』